

# 社会倫理のための一視点 (I)

岩本 忠夫

(平成22年11月1日受付)

## An Approach to Education of Social Ethics (I)

Tadao IWAMOTO

(Received Nov. 1, 2010)

### Abstract

Recent rapid progress of natural science and technology in the world enables people to enjoy comfortable and rich lives. At the same time, it raises various ethical issues in many fields such as global environmental preservation, information technology, engineering, medicine and so on. In such a social situation, universities in Japan have begun to add applied ethics to the curriculum. My university started teaching social ethics in 2010.

This paper tries to present some of the ethical standpoints on which the applied ethics course is based. It is important to understand the historical currents of thought in traditional ethics. Applied ethics must be taught in consideration of such currents.

**Key Words:** periodical influence on ethics, ethics of ancient Greece, Christian ethics

### 1 始めに

この小論は現代の社会状況が直面している社会倫理の問題を解決するための視点を模索してみようとするものである。特にその視点設定の手掛かりを倫理思想の歴史の変遷の脈絡上に求めてみようとした。もちろん古来の倫理思想の歴史を正面から取り扱うことができるとは思っていない。しかし現代の社会倫理の問題を考えるにあたって有効だと思われる視点を引き出すために、きわめて概括的であっても倫理思想の歴史を私なりに一瞥してみることは十分意味あることだと思われる。

上記のような記述意図を持つにいたった契機は日本の大学教育に近年急速に倫理教育、なかんずく生命倫理、環境倫理、技術者倫理等の応用倫理学が広く導入されるようになってきたからである。それらの応用倫理学に関する著作も数多く刊行され始めている。しかしながらこのような応用倫理学が従来の倫理学とどのようにつながっているのか、必ずしも明確でない。応用倫理学の課題の緊急性のゆ

えに古来の倫理学にこだわっているいとまがないのが現状のようである。しかし応用倫理学が根無し草の学問にならないためには基礎倫理学に十分基礎づけられねばならない。迂遠に見えても応用倫理学が従来の倫理学の成果を十分踏まえる努力を惜しんではならないであろう。急がば回れ、という諺の通りである。

### 2 科学技術の発達と倫理とのアンバランス

19世紀のイギリスの哲学者にして経済学者であるJ・S・ミルは彼の著書『功利主義論』を次のような言葉で始めている。「人間の知識の現状をみてわれわれが意外に思うのは、正邪の基準に関する論争の決着をつける仕事に、ほとんど進歩がみられないことである。いちばん大切な問題についての思索が、いまなお遅れた状態のまま停滞していることを、これほどはつきり示すものは少ない<sup>1)</sup>」。

自然科学及びその技術的応用である科学技術=テクノロジーは自然現象を支配している自然法則の発見とその目的論的応用を目指すものである。だから基本的に時代と場所

\* 広島工業大学工学部知能機械工学科

及び人間の個性の制約を免れた普遍妥当性に強力に支えられている。従ってそれは世代間のバトンタッチが容易で、次世代は前世代までの学問の成果を受け継ぎ、そこから出発することができる。知識を次々に積み上げてゆくことが可能なのである。特に近年 200 年ばかりの間の科学技術の発達はすさまじく、それにとまなう人間生活の利便性の向上は予測を超えたものであつただろう。医療技術の進歩による人間の平均寿命の延長、冷暖房施設の完備による快適な日常生活等々、科学技術がもたらした利便性を失うことを望む者はいないだろう。そればかりか欲望の肥大した現代人はさらに豊かでさらに便利な生活を求めてやまないのである。

ところが、一方、人間の倫理の問題は余程勝手が違うのである。倫理の問題は各時代、各社会、各地域の個別の条件によって制約されている。すなわち自然科学や応用科学のような普遍妥当性を無条件に主張することができない。時代的、社会的恣意性や固有の状況に左右される可能性を免れることができない。しかしある時、ある場所で生まれた倫理観がそれゆえに普遍妥当性を持ち得ないというでもない。たとえその程度に差があるにせよ、時と所に制約された個別の倫理観にはその個性にもかかわらず時代と地域を超えたある普遍的妥当性を含んでいるものである。歴史は繰り返すといわれる。時代や社会は移り変わっても人間性はそう簡単には変わるものではない。むしろ自然科学や応用科学の成果はその進歩とともに克服され古びてゆく運命にもある。倫理思想は古くて新しい。はるか昔に生まれた倫理思想が新しい時代状況の中で見直され新鮮に輝くことはいくらでもある。古典とはそういうものであろう。

倫理という言葉はしばしば道徳という言葉と並列して使用される場合も多い。必ずしも両者の概念の相異は明確に区別されている訳ではないが、ただ倫理はより普遍的で道徳はより恣意的な語感を持っているように思われる。倫理・道徳の思想は確かに時の権力者やある社会的勢力によって、あるいは時代そのものの特性によって恣意的に乱用される危険性も含んでいる。それゆえ倫理・道徳の問題がことさらに強調される場合はその倫理思想が生まれる時代背景を冷静にできる限り相対化しながら見極める慎重さも必要である。

特に倫理・道徳観の恣意的利用に深い警戒感を抱いてきたのが敗戦後の日本人である。戦前・戦中に世界の列強諸国を支配した帝国主義に日本も深く染まった。日中戦争、第二次世界大戦、そして太平洋戦争が勃発した。そのような激動の時代の日本社会を覆い尽くした倫理・道徳は皇国史観にもとづく忠君愛国思想である。当時小学校から大学にいたるまで、滅私奉公、お国のために命を捧げるのがもっとも尊い日本人の生き方だと教え込まれた。しかも大多数

の日本人はそれを疑わなかった。次々に召集された若い将兵たちは南方の諸島で玉砕した。玉の如く美しく散るのである。そして銃後の日本国民は「欲しがりません、勝つまでは」と極端な窮乏生活に耐え、沖縄戦や原爆投下に殉じたのである。

1945 年 8 月 15 日の無条件降伏を境に倫理・道徳観は一夜のうちに一変してしまったのである。学校の教師たちも、あれだけ戦争を煽ったジャーナリズムも昨日までの忠君愛国道徳を一斉に非難し、平和の尊さを説き始めた。それ以来戦前修身の時間に説教された倫理・道徳の連想から戦後の日本人には倫理・道徳という言葉に偏狭なナショナリズムの印象がいつまでも付着している。

さらに戦後の倫理観にとって別の意味合いが加わってきたことにも触れておこう。それはマルクス主義思想と社会主義・共産主義の運動である。それらは戦時中、時の権力者によって厳しく弾圧され非合法化されていただけに、終戦後それだけ華々しく復活した。戦後の労働運動の活発化とともに、戦後の若者にとって社会変革への参加は良心的に社会的正義を實踐していくための必須の条件とみなされた。

ところが 1980 年代にソ連の指導者ゴルバチョフ氏によって推進されたペレストロイカの運動は結果としてソ連邦の崩壊を招いた。東欧諸国はソ連の支配から解放され、特にドイツではベルリンの壁が打ち壊されてかつての東ドイツが西ドイツに吸収されドイツ連邦共和国が誕生した。それ以来世界の社会主義陣営と資本主義陣営との冷戦構造が融解し始め今日にいたっている。

このような世界の急速な政治、経済情勢の変化のうちに、日本の社会主義運動や労働運動は目に見えて衰退し始めた。このような情勢にこたえるように日本のマスコミ・言論界の論調も社会主義運動や労働運動を社会的正義の實踐とみなさなくなったばかりでない。むしろ冷やかで批判的、否定的にとらえるようになった。なんという豹変ぶりであろうか。この言論界の状況迎合的な姿勢は戦前も戦後も変わっていないのである。

しかしながら現代の結果論的観点から戦前の倫理観、戦後の社会主義的倫理観に批判を加えようとするとはいかにも安易なことではないか。むしろ我々は歴史から学ばねばならない。戦前の帝国主義の時代には武力で国を守ることの必要性は少なくとも止むを得ないことと考えられた。戦後の階級闘争の運動もまた然りである。富の分配の社会的公正はいまも厳然と存在する。社会主義の運動を支えている理念に強い倫理性が含まれていたことを見逃すことはできない。それぞれの時代に求められる倫理・道徳はその時代ののびきならない緊張関係において生ずる。倫理・道徳の問題は時代的に条件づけられている。しかし倫理・

道徳のこの時代的限界は恣意性で済ますことのできないもっと根深い人類の歴史的発達の必然性と絡み合っていることがわかる。人類はいつの時代でもその時代の制約を蒙りながらもより普遍的妥当性を備えた倫理思想を生み出すべく努力を続けているのである。自然科学や科学技術の成果は常に克服されてゆく。それに対して倫理思想は時代によって常に見直され新しく生かされてゆく。この違いは両者のアンバランスと考えるのではなく、学問の性格が異なるのである。近年科学的証明のできない思想は形而上学という名のもとに多少冷笑的に遇されている。しかし、その一方で形而上学の性格を持った倫理学、とくに応用倫理学の必要が叫ばれているのである。

### 3 古代ギリシアの倫理思想の概観

すでに述べたように20世紀の末葉、国際的に社会主義勢力の退潮が顕著になり始めて以来、資本主義への抑制力が希薄になりつつある。ロシア、中国などかつての有力な社会主義諸国の資本主義化も進んでいる。今日資本主義的経済といえども自由競争に任せておけばそこに自然に経済秩序が形成されるだろう、といった経済的予定調和を信ずる者はいないだろう。しかし私有財産制度と利潤追求及び自由競争という資本主義の原則は、福祉制度がよく整えられた国々においても基本原理に変わりはない。近代資本主義が高度化するにつれて、国際的規模における国家間の、また企業間の科学技術の開発競争は熾烈になるばかりである。資本主義経済が回転してゆくためには、新製品の開発によって絶えず新しい需要を喚起し続けることがどうしても必要なのである。新しい需要は新規の大量生産と大量消費及び大量廃棄に結びつく。この資本主義的循環は地球環境の汚染と破壊を宿命的に引き起こす。それだけにとどまらず人間の欲望の肥大化という精神の調和の破壊も始まっているのかもしれない。そのような危機意識が社会の多方面で倫理問題を生じさせているとも考えられる。それらの倫理的問題がその場しのぎの対症療法でなければよいのだが。社会倫理の問題は大きな視野でとらえることも必要なのである。倫理思想の歴史をさかのぼり歴史的観点の中に現代の倫理の問題を位置づけることも必要である。

人間はすでに紀元前の昔から人間としてどう生きるべきかという人としての生き方の問題に対して自覚を深め始めている。たとえば古代インドでは紀元前5～6世紀には『ウパニシャッド』が成立している。そこには古代アリア人の宇宙観、人間観が示され煩惱からの解脱の境地が説かれている。ほぼ同じころ古代中国の春秋・戦国時代には諸子百家が輩出している。そのころ儒の教えの創始者孔子の語録ともいえる『論語』が著された。孔子の教えの中心思想は「仁」の徳であり、これは今日なお受け継がれるべき

人倫の不朽の指導理念である。

古代ギリシアでも同様に紀元前6世紀ごろには哲学者ピタゴラスが倫理思想の一端を語っている。しかし特に都市国家アテネに偉大な哲学者ソクラテス、プラトンが現れるに及んで、その倫理思想はその後のヨーロッパの思想史に尽きることのない多大の影響を与え続けている。この古代ギリシアで生まれた倫理思想は理性（ロゴス）への深い確信に裏付けられていて、その学問的方法論の確かさ、卓抜さはあまりにも時代を先取りし過ぎていたとの印象さえ受ける。この古代ギリシア生まれの倫理思想の概要をとらえておくことは倫理思想の歴史記述の必須要件である。

ギリシア哲学の中心的存在であるプラトンの師ソクラテスは当時のアテネのある勢力によってアテネの法廷に告訴され死刑の判決を下された。刑が執行される以前、収監されていたソクラテスは弟子の一人クリトンの訪問を受ける。クリトンは判決の不当性を主張し師ソクラテスに脱獄を促す。プラトンの対話編『クリトン』中で、クリトンの脱獄の勧めを断ったソクラテスはアテネの国法が自分のように嘯くとクリトンに語る。「まあ、いずれにしても、いまこの世からおまえが去ってゆくとすれば、おまえはすっかり不正な目にあわされた人間として去ってゆくことになるけれども、しかしそれは、わたしたち国法による被害ではなくて世間の人間から加えられた不正にとどまるのだ。ところが、もしおまえが、自分でわたしたちに対しておこなった同意や約束を踏みにじり、何よりも害を加えてはならないはずの、自分自身や自分の友だち、自分の祖国とわたしたち国法に対して害を加えるという、そういう醜い仕方では、不正や加害の仕返しをして、ここから逃げていくとするならば、生きているかぎりのおまえに対しては、わたしたちの怒りがつづくだろうし、あの世へ行っても、わたしたちの兄弟たる、あの世の法が、おまえは自分の勝手で、わたしたちを無にしようとするくわだてたと知っているから、好意的におまえを受け入れてはくれないだろう」<sup>2)</sup>。ソクラテスは自分の行動を決するにあたって、自分だけが蒙る被害と自分の家族、友人たちを含むアテネという共同社会が蒙るであろう害悪とを比較考量して、あくまでも公の立場で自分の行動の是非を判断している。そこに働いているのは明らかに客観的分別能力、すなわち理性である。ソクラテスは理性の声に耳を傾けそれに従って行動したのである。また注目すべきは、ソクラテスが死後のあの世の世界でも国法の咎めから免れられないことに言及している点である。倫理の問題と人間にとっての死の不可避との関わりについては十分検討しなければならない。

人間の魂を三つの部分に分ける考え方が、古代ギリシア以来ヨーロッパ人の人間観を支配してきた。すなわち理性と意志と情念である。たとえばプラトンの対話編『国家』



によれば、ポリス国家の運営とポリス市民の行動とは、共に同じ徳の原理によって導かれねばならない。まず理性を働かせることが「知恵」の徳である。知恵が与える行動の指針に従い意志の力により決然と実行するのが「勇氣」の徳である。そして理性と意志とに従い情念を制御しつつ生きるのが「節制」の徳である。このようにして三つの徳が調和を得て働いている状態が「正義」の徳であった。このようにポリス社会の運営方法であっても、各市民の行動の仕方であっても、それらを導く力を唯一理性に求めることが古代ギリシアで成立し、その後のヨーロッパに引き継がれてゆく倫理観の基本的観点である。プラトンの対話篇『国家』の中でソクラテスは理性に生きる哲学者こそがポリス国家の支配者となるべきだと主張する。なぜならば「政治的権力と哲学的精神とが一体化されて、多くの人々の素質が、現在のようにこの二つのどちらかの方向に別々にすすむことを強制的に禁止されるのではないかぎり、親愛なるグラウコンよ、国々にとって不幸のやむことはないし、また、人類にとっても同様だとぼくは思う」<sup>3)</sup>とソクラテスは考える。ソクラテス、プラトンにとって理性を中心に置く倫理観の最終目的は人間の幸福なのである。

ソクラテス、プラトンの倫理思想を受け継ぎながらも、その理念的、観念的傾向を修正してより現実的立場に立って「倫理学」として独立した学問領域を打ち立てたのがアリストテレスである。彼の倫理学説は『ニコマコス倫理学』でより整えられた体系性を以て詳細に記述されている。プラトンの対話編の中ですでに諸徳をはじめとしてあらゆる価値の根拠となっているものとして善いもの、すなわち善がその根源価値として説かれていた。アリストテレスの倫理学においても、人間のすべての行為は善いものを求めてなされると考える。いろいろな行為に応じて善いものにもいろいろの区別があるにしても、それぞれの行為が目指している善いものとしての目的は並列的に並んでいるのではない。そこには目的系列の複雑な連鎖が形成されており、その目的連鎖の最頂点に最終目的がなくはない。この最終目的はその目的自体で自足していて、それこそが最高善であり幸福そのものである。人間の行為が目指す究極目的は最高善であり、それは幸福以外のものではない。この最高善としての幸福が個々諸々の善を求める多方面の技術や専門知識を統括し方向づけている。個々人が幸福を求めることもポリス共同社会が幸福を求めることも共に同じ目的を求めているのだが、社会にとっての善の実現の方がより究極的な目的であるとアリストテレスは考える。それが政治術の領域である。

ではアリストテレスにとって最高善としての幸福とは、より具体的に人間生活のどのような状態を示しているのだろうか。彼は人間の生活を大きく三つの状態に区分する。

その一つが感覚的快樂を求めて生きるもっとも低位の奴隷・家畜的な享樂の生活である。二つ目が社会的名誉を求めて生きる政治的生活であるが、しかし社会的名誉はそれを受け取る者より与える者に依存しているのであるから、その幸福は根底的なものではなく表面的なものである。最後の三つ目が観想の生活でありこれこそがもっとも幸福の実現された生活である、とアリストテレスは考える。彼は次のように言う。「このようにして、もしも、器量によって生まれる行為のうち、政治と軍事にかかわる行為はその美しさと大きさにおいて他に優越するが、それらは余裕をもたず、或る〔他の〕目的を目ざし、そのもの自体のゆえに選ばれる行為ではないとすれば、これに対して、観想活動としての理性の活動はその専心において他に抜きんで、そのもの自体以外の他のいかなる目的にも向わず、また、快樂をそのもの自体のうちにそなえていると考えられるならば（この快樂は活動に加わり、活動を強める）、また、人間に許されるかぎりでの自足と余裕と無窮、すなわち、何であれ、幸いなひとに帰せられるかぎりのすべての特徴がこの活動によって生まれてくるのは明らかであるとすれば、……これこそ人間の持ちうる完全な幸福であろう。……こうして、理性が人間に比して神的なものであるとすれば、理性にしたがった生活も人間的な生活に比して神的な生活であることになろう。だが、われわれは『人間であるかぎり、人間のことを、死すべきものであるかぎり、死すべきもののことを想え』と勧めるひとびとの言葉に随ってはならない。むしろ、われわれに許されるかぎりにおいて、不死なるものに近づき、われわれ自身の内にあるもののうちで最高のものにしたがって生きるようあらゆる努力を尽すべきである」<sup>4)</sup>。こうアリストテレスは言う。人間は理性に従って生きるときもっとも幸福でありもっとも快い。しかもそのとき死すべき人間は不死の神にもっとも近づく。人間の実践的活動は肉体的な情につながることに甘んずることなく神的な理性の実現に努めよ。それが究極的な幸福に向かう道であると考ええる。

上記のアリストテレスの言葉はヨーロッパの倫理思想の一つの極致を語っていると考えられる。しかし現実を踏まえることを忘れない彼は理性的に生きている人間の行為の特長として、中庸の徳が発揮されていることを重視する。理性的行為には過不足がなく、調和がとれていなければならない。

#### 4 古代ギリシアの倫理思想からキリスト教への移行

古代ギリシアの倫理思想からキリスト教の教えへのつながりは実に緊密である。ここでは特に理性と不死及び愛の思想に焦点を当てながらそのつながりの一端を略述してみたい。

古代ギリシア人の心を深く捕えていた人間観は、死すべく運命づけられている人間ということである。この重い人間存在の本来の悲劇性と宿命にどう向き合うべきかという問題が多分ギリシア人にとって最大の課題であった。古代ギリシア以前の歴史の中では、理性的存在として人間をはっきり自覚することはなかった。その限りでは死の問題は神秘的な神話の世界に溶かしこまれていた。しかしギリシア人にとっての神々は人間世界の生き写しであって、神々の心情は人間のそれと何ら変わる所がないのである。神々を人間から隔てている決定的断絶はただただ神々の不死性と人間の死への定めだけであった。人間の理性を自覚し始めた古代ギリシア人にとってこのことは堪え難いほどの不条理であった。この不条理を克服する糸口を古代ギリシアの哲学者はおそらく理性に見出したのである。すでに述べたように『クリトン』の中でソクラテスはあの世の国法について語っていた。プラトンの対話編の一つ『パイドン』中でも登場人物ソクラテスを中心として人間の魂の不滅が証明される。その魂不滅の考えの有力な根拠の一つは人間が理性を持って生まれてくるということだった。また先に『ニコマコス倫理学』から引用したアリストテレスの言葉も、人間の理性の中に神性を見出し、従って理性に生きることによって人間は不死の神に限りなく近づくことができると考えるのである。

古代ギリシアの倫理思想で見逃すことのできない重要な観点の一つが愛の観念である。プラトンの対話編『饗宴』は登場人物たちが愛の本質をさまざまな視点から討論していることで名高い。その中で愛について語るソクラテスにとって、もっとも愛が純化されて表れるのが真理への愛である。肉体的、感性的愛が否定されるわけではないが、それを超えて愛が理念を求めて向上してゆくことが大切なのである。アリストテレスも愛の問題を現実の人間をよく観察しながら分析的に考察してゆく。たとえば『ニコマコス倫理学』中で「善いひとびとの間の愛がもっとも優れた意味での愛である」<sup>5)</sup>と述べているが、そのような愛がもっとも美しいとも言っている。

やがて古代ギリシアの盛期は過ぎ去り、ヘレニズムの時代を経て古代ローマへと移ってゆく。このような歴史的進行の中で古代ギリシア人の倫理観を支えていたポリス共同体が衰退し、同時に民族的連帯感も希薄になっていった。いわゆる世界市民主義という茫漠とした社会的背景の中で生きてゆくことを余儀なくされた人々は社会的帰属感を失ってゆく。そのように孤立してゆく人々の心をとらえるのは個人主義的な意識と不安感だったのだろう。ヘレニズムの時代の哲学・倫理思想の特徴はそのような時代状況から生まれてきた。

デモクリトスの古代原子論の考えを受け継いだエピクロ

スは快楽説を唱える。しかし快楽説の趣旨は苦痛や不安、煩わしさから解放されて自由に冷静な境地に生きようとする逃避的な生き方であった。死は感覚からの解放であるから少しも悪いものではないと説かれる。

古代ギリシアの理性哲学を発展させたのがストア学派であった。宇宙の現象を支配しているのは理性であり、理性は神である。人間は理性が支配する自然の一部だから自然法則に従って生きよう運命づけられている。理性によって情念を制御すること、これがストイシズムである。

ヘレニズムの諸国が次々に滅ぼされて古代ローマによる地中海周辺の広域支配が始まるに及んで、ギリシアの哲学は新プラトン主義によってその最後が締めくくられる。新プラトン主義は3世紀ごろプロティノスによってその基礎づけがなされた。その思想は勿論プラトンの哲学思想の傾向を濃厚に受け継いでいるが、しかし新ピタゴラス学派、アリストテレス、ストア学派などさまざまな思想が総合化されている。元来プラトンの思想はイデア論によって説明されることが多いが、このイデア界が究極的な神とも善とも名づけ得る一者を媒介することになる。このようにして新プラトン主義は神秘的要素を益々帯びてくる。そしてキリスト教成立期の初期キリスト教の教義の確立に深い影響を及ぼし、古代ギリシア思想からキリスト教思想への橋渡しの役割を果たすのである。

## 5 キリスト教における理性と愛と不死の思想

古代ギリシア人が明確に自覚するようになった理性（ロゴス）の概念は多義的である。現象を背後から支配している合理的・論理的法則性であり、そのような合理性を解明できる人間の合理的思考能力でもある。また人間の思考は言葉によってなされるが故に、人間の持つ言語の論理的運用能力でもある。言論と言い替えてもよい。だから端的に言葉を意味しているとも言える。

周知のように新約聖書のヨハネによる福音書は次のように始まる。「初めに言(ことば)があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は初めに神と共にあった。すべてのものは、これによってできた」<sup>6)</sup>。旧約聖書の創世記では神の言葉（ロゴス）によって世界が創られる。まず「光あれ」と言われ、昼と夜ができる。そして順次世界が創造されてゆき1週間で創造の仕事が完了する。旧約聖書の出エジプト記ではモーセは神から命ぜられる。「あなたは殺してはならない。あなたは姦淫してはならない。あなたは盗んではならない。……」<sup>7)</sup>。すでに古代ギリシア時代確かに理性に神性を見出す傾向は進んでいた。しかし理性は他方合理性、論理性ともつながっていた。ところがキリスト教においては理性の神性が強調され合理性とのつながりがはるかに後退してしまった。それは当然なことであ

る。神の超越性の強調は世界の合理的理解とは相容れないからである。論理性を超えて神は端的に命令するのである。このことはルネッサンス以後よく指摘されるように歴史の後退を意味しているのだろうか。たぶんそれは一面的見方である。キリスト教によって人々は新しい精神を獲得し、野蛮さを克服してゆこうとしたのである。

新約聖書ルカによる福音書第10章中でイエスは良いサマリア人について語るが、そのきっかけは次のような質問であった。「するとそこへ、ある律法学者が現れ、イエスを試みようとして言った。『先生、何をしたら永遠の生命を受けられましょうか。』彼に言われた、『律法にはなんと書いてあるか。あなたはどうか読むか。』彼は答えて言った。『心をつくし、精神をつくし、力をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ』また『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』とあります。」彼にいわれた、『あなたの答えは正しい。そのとおりに行いなさい。そうすれば、いのちが得られる。』<sup>8)</sup>。ユダヤ教の律法の外面性がイエスにより内面化されたといわれる。社会の掟や秩序を守って人々が平和に暮らすことが律法の趣旨だった。モーセによって与えられた十の戒めも社会の一員として当然守らなければならないことばかりである。その諸々の律法が由来する精神をイエスは重視したのである。そしてその精神を凝縮して示したのが隣人を愛せよ、との命令であった。しかしこの命令は実に恐ろしいほどの広がりにおいて人間の行動を規定する。世界を創造した神にとって人間も当然神の被造物に過ぎない。人間の心は隅々まで神に見つめられている。決して神を偽ることはできない。

神を信じ神の教えに従って生きることによって、人間は永遠の命を与えられる。しかしながら人間は本来救いがたいほど根深い自愛（エゴ）に生きている。人間同士利害の対立の中に生きている。隣人愛の教えを守るためにはこの利己心を離れなければならない。そのようなことが人間にできるだろうか。古代ギリシア人の根本的問題であった死すべき存在としての人間の宿命を免れられる確かな指針をキリスト教が与えてくれた。しかしそのためには従うに従い難い隣人愛の教えに生きなければならない。「らくだが針の穴を通るほうが金持ちが神の国へはいるよりはやさしい<sup>9)</sup>」と言われると、金持ちは呆然とする。しかしそこから喜捨の精神が芽生えるのである。キリスト教の倫理がヨーロッパ人の倫理的感性をどれ程育んできたか想像を絶するものがある。

## 文 献

- 1) 伊原吉之助他：世界の名著 38 ベンサム, J. S. ミル 昭和 42 年 中央公論社
- 2) 田中美智太郎：世界の名著 6 プラトン I 昭和 57 年 中央公論社
- 3) 田中美知太郎：世界の名著 7 プラトン II 昭和 56 年 中央公論社
- 4) ~ 5) 加藤信朗訳：アリストテレス全集 13 ニコマコス倫理学 岩波書店
- 6) ~ 9) 聖書 日本聖書協会 1971
- 10) 哲学辞典 平凡社, 1992